

先生は九十歳代半ばで、もう耳が聞こえませんが、事が事なので京都から電話で、「永尾さん。裁判に出られるそうだが、自分が悪かったというのを忘れずに、行ってください」と、いうだけいって電話が切れた。いいたいことはいっぱいあったけど、金子先生には、お耳が悪くて通じません。その日も裁判に出る日でしたが、先生の「自分が悪かったというのを忘れずに」の一言が耳から離れず、結局、徹底抗戦の構えから一転して、全面的に相手の言い分を受け入れて、お金を払って和解した、といわれます。

義の名において、断乎筋を通す必要がある。こちらに何の落度もない。びた一文も私わんでいい。徹底して戦おう、これが世間常識。それならよくわかりますね。ところが仏法では、「自分が悪かったというのを忘れずに」といわれる。こちらに落度はない上に、当節こうした、取れるものは取るの風潮が横行しているのに一矢を報いるのは、社会正義の立場からも当然、望ましい態度でないのかと思えますね。どうしてこちらが悪いと思わなきゃならぬのか、首をかしげさせられま

すね。私もその点を、永尾さんにおたずねしました。そして、永尾さんはこういわれました。金子先生は常日頃から、「われ正しと思わば負けよ。さすればそこに平和あり」とか、「正義は負け

ろ」とおっしゃっていらした。今回の事件でも、こちらに落度はない。むしろ相手の側に誤解がある。でも、正義は我にありと主張するとき、相手を文句なしに悪者にしてしまっている。そのときこちら側にある、傲慢といつてもいい姿勢の高さ。これはもう先生がおっしゃる「私の方が悪かった」の一つでないか。そして頭ごなしに相手を悪いと決めつけるときには、働き盛りの大黒柱を失った遺族の人たちの悲しみ、苦しみ、やり切れないさを、全然眼中に入れない冷酷残忍さがあるのではないか。正義をタテにとる者の惨酷さ、これも「私が悪かった」の一面でないかと、私は金子先生のお心を、自分なりに解釈しています。そして「どこまで戦うぞ」と争い続けるところには、こちらもどげどげしい、戦闘的な身構えで、憎しみと怒りで我を忘れた泥沼にはまり込んで、傷まみれになり、くたびれば、て、自分も相手もズタズタになってしまふ。それを思うと、相手も満足でき、私も心安らいで、こういう形で解決できてやはりよかった、今でも思っています。(以下略・引用終わり)

夜席からの法座では、「愚者往生道」として、以下のようなお話も下さいました。

ただ漫然と如来さまの前で手を合わせていたってだめ。自分を見せてもらった時にはじめて如来さまと出遇えるんです。罪悪深重、煩惱具足の凡夫の自分と出遇わせてもらうと、初めて如来さまと出遇わせてもらえる。こういうことを現代の私たちはしっかりと聞き分けていかないと、いつまでたっても仏法は分かりませんよ。お寺で口先だけで調子を合わせてするお念仏で一生終わってしまう。そういうお念仏やっていて、私たちが在家の人間は何にもなりません。お寺はそれで儲かるでしょう。だけど私たちが在家は「虻蜂とらず。何にもなりません。だから本当の手応えのあるお念仏をもらってください。それは真剣勝負です。ご住職と。それをやらなくちゃいかに(終)。

誓子の日記

今年の夏も暑かったですね。■中一の学(二男)は、学校は違うもののお兄ちゃんと同じ部活に入り、日焼けして真っ黒けになりました。■小六の遊(三男)は相変わらずマイペース。呑気にごろごろして暮らしています。■ちよつと前の話ですが、三男遊といっしよに算数の勉強中、遊が私に質問しました。遊「お母さん超と真ん中つてどういう意味？」私「????」問題を見るとこう書いてありました。「A地点から兄が、B地点から弟が発発して、ちよつと真ん中から百五十メートルのところでお会いしました。」。わはははは(笑おしまい)。